

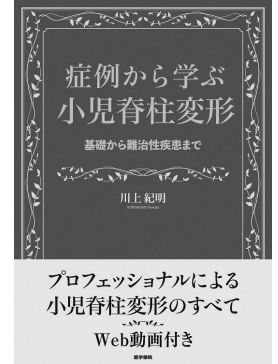
症例から学ぶ小児脊柱変形 基礎から難治性疾患まで

川上紀明・著

【評者】 清水敬親

(榛名荘病院群馬脊椎脊髄病センター名誉センター長)

A4判・308頁
2025年10月
定価：19,800円
(本体18,000円＋税10%)
ISBN978-4-260-06225-1
医学書院 刊



26年前に初めて川上紀明先生と言葉を交わし、以後さまざまな脊柱変形症例について幾度となく教えを乞い意見を求めてきたが、初めの数年間は川上先生のおっしゃることに私の理解が追いつかないことが多々あった。そんな私が本書の書評を書くのは大いに気が引ける。まずは一気に読破してから書評を——、となりそうなものだが、読み始めたら川上先生から個別指導を受けているような錯覚にとらわれ、内容を真に理解しようと幾度も立ち止まり、自分の経験した類似症例と比較したり、と多くの時間を要することとなった。

私の脊椎外科人生39年間を振り返る時、「その専門性の有無にかかわらず、全整形外科医はもとと小児整形外科疾患に目を向けるべき」、「成人脊柱変形の診療には、小児脊柱変形の基礎知識が必要不可欠」と反省すべき幾多の経験がよみがえる。その原因は個の努力の問題のみではなく(少なくともわが国における)整形外科教育のあり方にも問題があったのではないかとも思えるときもある。

本書はまさにこの2点を改めて鋭く指摘し、知識の押し売りではなく、実臨床例に即して病態から治療の流れを解説してくれているように感じた。多くの動画がより理解を深めてくれる。

本書中にちりばめられた珠玉のお言葉の中から特に心に残ったものを挙げる。

1) 「筆者は自分が関わった患児の将来について無責任ではられない」

一般的な疾患で、さほど難易度の高い手術を行った患者の術後不具合すら十分にフォローしない(できない)脊椎外科医にだけは決してなるま

い！ 椎弓根スクリューが使いにくい場面において、他の手段(フックや椎弓下ワイヤーなど)をいつでも駆使できる能力は、術者にとっても患者にとっても明らかにメリットである。

2) 「よほど体力・精神力があり肝の据わった脊椎外科医でない限り、前向きに手術の必要性を説明し、全責任を負い、手術を勧めることは難しい。(中略)ICUが整い、術後ケアが専門家によりカバーされる環境がない限り、今後とも本疾患(神経筋原性側弯症)の手術は広く普及しないのではないか」

まさに将来を憂えておられる川上先生の不安な気持ちが伝わってくる。

最終章で「側弯症術後の再手術」について記載されたのは秀逸である。再手術例こそが自らの反省や、世間で起こりがちな不具合(不手際)の原因を知る大きなヒントを与えてくれる。ここから逃げているようではいかなる進歩もない。共感すること大である。

読み終えてみると(たとえ私には実行不能な手術でも)、本書に書かれているコンセプト・アイデアなどが、全部とはいかないまでもかなり理解できるようになっている自分に気付き、26年という歳月の流れを感じ、思わずほほ笑んでしまった。多くの脊椎外科医、整形外科医、小児整形外科医の先生方に、この分野における世界の偉人のお一人である川上紀明先生の知識・技量・情熱の全てを感じ取っていただけたらと心の底から思う次第である。